ストウ庭園における構成の変遷

THE TRANSITION OF COMPOSITION IN STOWE GARDENS

田路貴浩*, 真木利江**, 田中 崧***

Takahiro TAJI, Rie MAKI and Iwao TANAKA

Stowe is one of the most representative English landscape gardens in 18th century. The purpose of this paper is to make it clear how this garden was developed. In respect of the exploited sites, the process of development can be divided into 8 periods. The following were made clear: so far as composition of the plan is concerned, there are phases of axis, expanse, circular paths, and irregularity. So far as composition of scenery is concerned, there are phases of vista, panorama, seen and hidden, representation of ideal landscape, naturalization, and use of surrounding landscape.

**keywords:** Stowe Gardens, landscape garden, 18th century, England

ストウ庭園, 風景庭園, 18世紀, イギリス

はじめに

本稿は、自然と人工を総合する技術としての庭園のあり方を追求するため、イギリス風景庭園に着目し、そこで自然／風景／建物が庭園としてどのように構成されていたかを明らかにしようとするものである。

バッキンガムシャーに位置するストウ庭園(Stowe Gardens)には、ア イルシャーに位置するストウ庭園(Stowe Gardens)には、ブ リッジマン(Charles Bridgeman), ヴァンブラーソン(Sir John Vanbrugh), ギブズ(James Gibbs), ケント(William Kent), ラブランド(Lancelot Brown)ら当 時もっとも影響力のある造園家、建築家たちによって、18世紀の あいだ造られ続けた庭園である。そのように多くの能力と労力が注 がれたことから、ストウ庭園は「西洋における最も広大で壮観なビ クチャレンジ庭園」であり、「イギリスにおいて最も複雑で実験的であり、概念的にも技術的にも風景庭園に新しい形式をもたらし た」と評されている。

ここでは、三人の領主の時代、すなわち1680年のリチャード・テ ンプル・第3代準男爵(Sir Richard Temple, 3rd Baronet)によるハウス新築 から、造園にもっとも熱心だったリチャード・テンプル・コバム子爵 (Sir Richard Temple, Viscount Cobham)を経て、1779年のリチャード・第2 代テンプル伯爵(Richard 2nd Earl Temple)の死去までの時期を取りあげる。考察にあたって造園時期をいくつかに区別し、それぞれの時期の庭園のあらしを確認しながら、各時期の平面図を再構成し、それをもとに庭園の構成方法を探ることにする。

庭園や建築物の設計年あるいは完成年は不明のものが多いことも あって、造園時期の区分についてはいくつかの説がみられる。その なかでももっとも信頼できるのはクラーク(George Clarke)による区分 であると思われるが、それにによって造園時期は6期間区分される(1715- 1719年、1720-25年、1726-32年、1733-39年、1739-43年、1743-49年)。われわれは、おもにこのクラークの説を参照しながら、その後続の時期も含めつつ、造園が行われた領域にもとづいて8期間に区分した(表1.2参照)。

各時期の歴史記述については、クラークらによるStowe Landscape Gardensをもとに参照した。また各時期の平面図は、それぞれ以下 の図版にもとづきながら作成した。第1期については、サムプスター(David Sumpster)が作成した1700年頃の復元図にとらかった。これは、1680年頃のハウス南側のパーサー・ガーデンに関する16の計画 案にもとづくもので、ストウ庭園の図面のなかでは現存するもっと も古いものとされる。第2期から第5期については、General plans of the Woods, Park and Gardens of Stoweに収められているブリッジ マン自らによる精密な平面図を用いた。これは第5期を終了し た時点で庭園の平面図と思われるが、第2期から第5期にかけて

* 明治大学理工学部 専任講師・博士（工学）
** 明治大学大学院理工学研究科 工修
*** 森ビル　工修

Lecturer, School of Science & Technology, Meiji Univ., Dr. Eng.
Graduate School of Science & Technology, Meiji Univ., M. Eng.
Mori Building, M. Eng.
はほとんど手直しされることなく、次々と庭園が拡大されると考えられるため、この面図から各時期の平面図を再構成した。その際、1719年のブリッジマンによる鳥瞰図（図）を補助的参照に用いた。第6、7期については、The Beauties of Staywに収められている平面図（図12）をもとに参考にし、同書1750年版に収められている庭園案内平面図を補足的に利用した。第8期は、Stowe: a descriptionに収められている平面図（図16）にもとづいた。

第1期 [1680-1713年]: ハウス周辺
ストウ庭園が造られた地所は、そもそも16世紀末にテンプル家の所領となったものである。この地所は、パイセスター（Bicesther）とタウセスター（Towcesther）を結ぶロマン・ロード（Roman Road）、パッキンガムからの幹線道であるヘイ・ウェイ（Hey Way）に合流する地点付近に広がっていた。ヘイ・ウェイの南には13世紀からの教区教会があったが、17世紀後半にはその西側に古いマナー・ハウスが建てられ、アーチュードとしてスタン・ロード（Stant Road）がもはや東西方向にせられ、その結果、ローマン・ロード、ヘイ・ウェイ、スタン・ロードの三本の道によって囲まれた三角形の場所が領域の中心となった。

1668年73年にかけて、スタン・ロード沿いに、ブドウ園とキッチン・ガーデンが設けられたが、1675-80年にかけて、古いマナー・ハウスは取り壊された。

1680年、第1期の始まりを表すのは新しいハウスの着工である（1683年完成）。古いハウスが取り壊された後、新しいハウスはオールダー川（The Alder川）のフィッシュ・ボンズ（Fish-ponds）地帯に造られ、その裏には、ウィルダネス（wilderness）が広がっており、そのなかに半円形の小径が設けられていました。1683年頃のマナー図形は、パーグラーダーゲンとハウスを南から望んだもので、囲まれた庭園の主軸上に階段や噴水が配されている様子がわかる。1712年にはローマン・ロードに沿ったハウス北側へのアプローチであるコース（the Course）が設けられる。

以前からあった教会、古いハウス、スタン・ロードはほぼ東西軸に平行して配置されていった。しかしこの時期に造られた新しいハウスとバリエート・ガーデンは、南南東へ下るオールダー川の谷地に平行する軸、あるいはその谷に沿って走るヘイ・ウェイに平行する軸に配置されている。一方、東西軸にしたがって造られたキッチン・ガーデンについては、その外廊は保存されたが、後から造られたバリエート・ガーデンから延びる主軸上の小径がキッチン・ガーデンを貫通し、イエペ・ヴォークまで延ばされている。新しいハウスの主軸が、以降からあるキッチン・ガーデンの上に書き出されているのである。第1期の庭園では、既存の庭園が続きすることなく、方位にしたがう軸を含むに対して新たに地形にしたがう軸（主軸）が加えられ、これら直交しない2軸によって造園が進められてきた。
第2期[1714-1719年]：パックスの庭園周辺

1714年にプリッジマンによる造園が開始され、1719年には建築家ヴァンブーグが招かれた。この時期の庭園は、もとで主軸に沿ったハウスの南辺と、主軸からまったいパックスの神殿周辺の二か所で行われた（図3参照）。

1717年、ハウス南側のパルサー・ガーデンは、フランス式のパルテール（Parture）と池に造りかえられ、また、主軸上にあったフィッシュ・ボンズは整形のオクタゴン・レイク（Octagon Lake）として拡張され、この池はハウスから切れたとき、正八角形に見えるように主軸沿いに引き延ばされた形に造りかえられている。また、池の中央には、アイキャッチャーとなるオベリスク噴水（Obelisk fountain）が置かれた。さらにその南側には、一対のレイク・パヴィリオン（Lake Pavilions、1719年、ヴァンブーグ設計で再建された。ハウスの北側には、主軸に沿って両側に並ぶ20余りの細長い池（1718年完成）が造られ、エントランス・コートとして整備された。

一方、ハウスの西側にはパックス神殿（Temple of Bacchus、1719年、ヴァンブーグ設計が造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテン・ガーデンを南面に分かちしていた池をロマン・ロードまで延長してクロス・レーン（Cross Lane）が造られ、その北西に造られ、スラント・ロードの北側には、キッテ
第4期 [1726-32年]: ホーム・パーク

庭園はブリッジマンによってさらに西に拡大されるが、1726年のヴァンブラの死去にもとどって、建築担当はギップスに引き継がれる。この時期は、ロトンダの南側に造られた広大なホーム・パーク（Home Park）によって特徴づけられる（図7参照）。ホーム・パークは庭園の要素として内部に取り込まれた実際の牧場で、ハバ（ba-ba）と並木道によって囲まれている。このような農場は当初、装飾された農場（ferme ornée）として建てられた。ホーム・パークの南西側にはロトンダと向き合うようにベルヴェデーレ（Belvedere, 1729年、ギップス設計）が設けられ、そこから北西に伸びる並木道の先の小高い場所にビラミッド（Vanbrugh Pyramid, 1726年、ヴァンブラ設計）が置かれた。またホーム・パークの南側にはイレヴァン・エーカー・レイク（Eleven Acre Lake）が造られた。イレヴァン・エーカー・レイクの南岸には、ハーミテージ（Hermitage, 1731年頃、ケント設計）が湖の畔につくられ、稲妻の上にヴィヴィーヌ神殿（Temple of Venus, 1732年、ケント設計）が建てられた。

ハウスと庭園への入口として一対のボイコット・パヴィリオン（Boycott Pavilions, 1728年、ギップス設計）が建てられる。1731年頃には、ヘイ・ウェイが西へ大きく迂回させられてこの入口に繋がり、庭園へのアプローチ道となった。またヘイ・ウェイがハウスの東を通らなくなったことによって、庭園を主軸の東側へと広げることが可能となった。

また、クーンズ・シアターの正面にはキャラライ王妃の像（Statue of Queen Caroline, ヴァンブラ設計, 1727年完成)が建てられた。

General plans of the Woods, Park and Gardens of Stoweには、ブリッジマンによる平面図の他に15枚の版画版が収められている。これらは、1733年にブリッジマンがフランソワから招いた画家リーグ（Jacques Rigaud）に描かせたものである。15枚の風景画のうち、8枚は主軸に沿った眺めであり、3枚はそれぞれネルソン・シートからの眺め、女王の劇場、パッカスの神殿、残り6枚は、ホーム・パークあるいはイレヴァン・エーカー・レイクとの眺めである（図8参照）。これらの版画を見ると、ロトンダ、ピラミッド、ベルヴェデーレ、ヴィヴィーヌの神殿、オベリスク噴水、ロジャーズ、ウェーバー、カウンチャーズ・オペリス、ダウズ・ケイ、ロトンダ、ガーネット・ウェーバー、スリーピング・バーナー、ジェージー1世の像、ジェージー1世の像、ラス・ガーデン、フライ・ウェーク、などが確認できる。
図8：リゴーによるピラミッドからの眺め（1733-34年）

図9：ピラミッド、ベルヴェデーレ、オペリスコの延長線上からみる

第5期（1733-39年）：イリジアン・フィールド

主軸の東側のオールダーハーフ川に沿った暖かでやかな谷に、ケントによってイリジアン・フィールド（Elysian Fields）が造られる。川の流れは貝殻橋（Shell Bridge）1730年、ケント設計によって二つの部分、上流のオールダーハーフ川と下流の名水川（Worthies River）に分けられ、それらの周辺に建造物が配された。

オールダーハーフの北端には、対岸の貝殻橋を両翼に伴ったグロッタ（Grots）1730年代、ケント設計が置かれ、そこから水が流れ出ていた。川の南には2つの部屋がある。また東岸には観想の神殿（Temple of Contemplation）1730年代、ケント設計が建てられ、その奥の整地の池の前にタイニーエ要素（Chinese House, 1738年設計）が置かれた。

名水川はさらに二つの部分に分けられている。上流には、川をはさんで対岸するように古代的神殿（Temple of Ancient Virtue）ケント設計、1737年完成）とイリジアン名水の神殿（Temple of British Worthies, 1734-35年）ケント設計が建てられた。その際、少し高い場所にある古代的神殿からは、イリジアン名水の神殿が水面に映し出された姿とともに眺められように配置された。古代的神殿の一部には、現代的神殿（Temple of Modern Virtue, 1737年、ケント設計）が廃墟としてつくられた。さらに、現代的神殿の両側は魔女の家（Witch House, 1738年）が置かれた。名水川の下流は再び並木道が続いて目立たない形で流れる。ケント設計の時代には、コンクリートのモニュメント（Congreve's Monument, 1736年、ケント設計）が、そこから少し南に離れたところにはペブル・アルコーブ（Pebble Alcove, 1739年、ケント設計）がつくられた。

オクタゴン・レインの西側には、カスケードとして人工の水槽（Artificial Rains, 1730年代末設計）がつくられた。また、つぎの第6期に本格的に造園が施される領域、オールダーハーフ川が流れる部分にパラディン・ブリッジ（Palladian Bridge）1733年、ケント設計が設計され、はるか遠くはあらびストウ・カースル（Stowe Castle, 1738年、ケント設計）が計画された。

ところでイリジアン・フィールドは、その名が示すように死者の楽園の再現として造られ、オールダーハーフ川と名水川流域の二つの領域に分けられる園地には、それぞれ対照的な雰囲気が与えられている。上流のオールダーハーフ川の周辺は、ステインズ（Stains）という別名が示すように茂った樹木に覆われた静かな場所であり、観想の神殿やグロッタが孤独・憂鬱に話されている。一方、下流の名水川の周辺は、樹木によって囲まれた、芝生の広がる滑らかで明るく開放された場所である。愛好者はこれら二つの領域を周遊しながら、対照的な雰囲気と様々な意味を味わうことができるようになっている。

また、イリジアン・フィールドはアディソン（Joseph Addison）の寓話的な夢についてのエッセイに用いられたものも含まれている。その夢は、アディソンがたくさんの小径が交差する森の中を歩む人々が歩いていたところ、さまざまな道が叢れの神殿で終わり、こうして名水の神殿が見え、一方に廃墟となった虚無心の神殿があった、というものである。この夢がイリジアン・フィールドに移され、長いまっすぐな道はデレクト・クロス・ライム・ウォーク、後の神殿は古代の神殿、名水の神殿はイギリス名水の神殿、廃墟となった虚無心の神殿は現代の神殿として具体化された。

コパム子爵の友人であったウェスト（Gilbert West）やポプ（Alexander Pope）ら文人たちは、アディソンの夢を政治的・社会の意味で解釈し、古代的神殿やイギリス名水の神殿を模倣されたものとして扱った。
第6期 [1739-42年]：ホークウェル・フィールド

イリジアン・フィールドの末に、おもにケントの構想によってホークウェル・フィールド（Hawkwell Field）が造られた（図12.13参照）。ホークウェル・フィールドは、南に向かって広がる細長い三角形の牧草地で、ホーム・パークと同じような装飾された農場である。しかし、比較的平坦なホーム・パークと異なり、オールダー川の支流をもとにも低い部分とした起伏のある地形となっている。ホーム・パークと同じように、ホークウェル・フィールドの周辺にも建造物が配された。

三角形の東端には女性の神殿（Lady's Temple, 1742年）、ギップス設計（1748年完成）、現女王の神殿（Queen's Temple）が、南側の底辺の稜線には、友情の神殿（Temple of Friendship, 1739年）ギップス設計が計画された。273 また、三角形の東側の辺の中点付近、オールダー川の支流に向かって下る丘の頂上には、ゴシック神殿（Gothic Temple, 1741年、ギップス設計）が配された。ゴシック神殿は正三角形の平面をもち、そのうち一つの頂点に塔が置かれたゴシック様式の建物で、祖先の自由に捧げられていた。ゴシック神殿からは庭園の外、東に広がる農耕風景を眺めることができ、アイキャッチャーとしてストゥ・カースルとキャパーズ・ロッジ（Keeper's Lodge, 1741年、ギップス設計、現アルボン・タワー・ボロン・タワー）が置かれた。

また1742年には、ハウス南側のバルテールが一掃されて、広い芝生に改造成されている。

ホークウェル・フィールドでは、ホーム・パークと同じように、牧草地の周囲に建造物が配されている。しかし、ホーム・パークでは上の境界はハーパー並木道によって囲まれ、そこを周遊するように意図されていたのに対して、ホークウェル・フィールドには一部を除いてハーパーは設けられず、羊や牛が遊ぶと一体となって眺められるようになっている。 LOOK に友情の神殿からは、オールダー川の支流とそこから盛り上がる牧草地の彼方に、ゴシック神殿と女性の神殿、あるいはイリジアン・フィールドの古代神の神殿の見晴らしを得ることができるようになっている。この眺めは休憩と広がりが同時に感じられる印象的な風景であり、ホークウェル・フィールドの園内においてももっとも意図されたものと思われる。イリジアン・フィールドが死後の発展を再現しようとしていたのでに対して、こうした風景によって、アルカディアをなわけこの世における理想的な休憩の世界の再現もくろまれていたのである274。このようにホークウェル・フィールドは、平面的には三角形の牧草地の頂点に位置する女性の神殿を中心に構成されているように見えるが、風景については友情の神殿からの見晴らしが中心に構成されていくことがあるだろう。また、見晴らしの中心の風景の構成はとは別に、庭園の外側にアイキャッチャーが置かれ、庭園の外の風景を取り込む手法が始められている。

第7期 [1743-49年]: グリシン・ヴァリー

グリシン・ヴァリー（Grecian Valley）はゆるやかに曲がるくの字型

の谷で、木立をなして走る小径が谷を囲んでいる（図12.14参照）。この造園はコパム子爵とその甥のリーチャード・第2代テンプル伯爵によるもので、ブラウンの助言を得て計画された275。

1747年に大規模な土木工事が行われ、谷が造成される。くの字の屈折部にはギリシア神殿（Grecian Temple, 1747～49年、ケントもしくは第2代テンプル伯爵設計、1762年完成、現アポライトと勝利の神殿 Temple Of Concord And Victoryが計画され、その北側にグリシン・コパム（Greeneville Colonyの1749年設計）を置かれる。当初、谷は湖とされ、その周辺にギリシア神殿と鹿船が配置された湖の周りを巡る周遊道の庭園として計

国13：第6期（1742年頃）
第8期【1750-1779年】: 全域
ストゥの領主はコバム子爵からリチャード・第2代テンプル伯爵に代わり、1751-53年かけて、庭園全域において大规模な改造が行われた(図15,16参照)。ホーム・パークのハハは取り除かれ、オクタゴン・レイクとレイク・エーカー・レイクが自然湖の池に改められた。ガーネット・ウォーク、グレイト・クロス・ルーム・ウォークなどの直線道は、壁木を間引かれて庭跡をとどめる程度に縮小された。庭園内の多くの建物が、移築もしくは取り壊される。オペラ劇場はグリシア・ヴァリーに移され、牧歌詩の神殿(Fane of Pastoral Poetry)と呼ばれるようになった(1760年代)。その際、牧歌詩の神殿の内部にはルフ・オペラスクがちょっと入口アーチに縁取られて見えように配された。また、グリシア・ヴァリーにあったグレンヴィル・コラムは、古代風の神殿から替えられようにグリシア・フィールドに移築された(1756年)。インペリアル・クローゼット(1759年)、スリーリー神殿(1760年代)、カウチャーズ・オペラスク(1763年)は取り壊された。

主軸沿いの構成も大きく変化する。1762年、エンペリアル・ウォークが拡張され、その先に置かれてあった一対のレイク・バビリオンも田園を広げるよう配置され直した(1764年)。その結果、ハウスからの眺めは広がりあるものとなった。主軸上のさらに南部には、コリント式アーチの凱旋門(Corinthian Arch, 1763年、トーマス・ビット設計,1767年完成が構築され、ハウスからの眺めの焦点はいっそう遠くに延長された。この凱旋門の南部には、主軸上に広く、2キロ以上の直線道であるグラン・アヴェニュール(Avenue, 1775年、現オールド・アヴェニュール)が整備され、バッキンガムからの来訪者を、丘の上の凱旋門からハウス正面を眺めることになった。一方、ハウス北側のエントランス・コートの池は取り除かれている。

1762-4年、女王の劇場は芝生となり、イエイブル・ウォークの拡幅にもとまとめて、キャロライン王妃の像がベルヴェデーレのある位置に置かれている。また、インペリアル・フィールドに、ドリス式ルフ・オペラスクアーチ(Doric Arch, ビット設計,1768年完成が置かれ、アーチからはホーム・ウェル・フィールドの向こうにあるパラディアン・アーチとさらに遠方のストゥ・カースルが見えられるように配置された。オールド川の中島にはクック・モナメントが建ち替えられた(1778年)。

第8期の造園では、平面的な拡張は行われず、新しい建物もほとんど建てられなかった。代わりに、自然な風景を目指して、グリッジマンによる整形的な要素を不整形化され、建物やモニュメントは間引かれ、人工的な要素は削られていった。それ同時に、庭園の外の視線の拡大は引き続き行われていた(図17参照)。

まとめ
最後に、各時期の庭園の構成方法をいくつかの平面構成方法と(図18参照)。
第1期から第3期の平面構成の主な方法は軸である。ハウスを南に沿って軸のほかに、建築物と建物群が軸で結ばれ配置が決定されていた。また、これらの軸は見通しが提供するという風景を形成していた。
第4期のホーム・パークでは、広い牧草地の周囲に建物群を配置し、来訪者を周遊させる方法に新たに用いられている。この方法によつて、それぞれの建物は独自の向こうに建物が点在する間見失う風景が得られるように構成されていた。
第5期から第7期にかけては、比較的開けた領域のなかに、理想とされる風景が再現された。第5期のインペリアル・フィールドは、地
形を活かした周辺施の構成を採りつつ、イリュージョンの風景が目指された。第6期のホークウェル・フィールドは、広い牧草地の周りに建築物を配置する平面構成で、ホーム・パークとよく似たような見せかけの風景が作られた。しかし、それはアルカディアの牧歌的な風景の再現が意図されていた。第7期のグリシー・アンフィアリでは、広がりの周辺に建築物が配置され、ここでもアルカディアの理想的な風景の再現が意図されていた。また、ギリシア神殿からの見通しの風景と、木柱のあとの小径からの見せかけの風景がつくられた。第8期では、平面構成は不整形化され、自然的な風景の構成が目標された。また、第6期から第8期までは、庭園の外に近接する建築物や風景と取り入れるような構成がなされた。

表3 各時期における平面構成と風景構成の方法

<table>
<thead>
<tr>
<th>平面の構成</th>
<th>第1期</th>
<th>第2期</th>
<th>第3期</th>
<th>第4期</th>
<th>第5期</th>
<th>第6期</th>
<th>第7期</th>
<th>第8期</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>非正方形</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>正方形</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>非正方形</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>広がり</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>角度</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

文献

参考文献